

伊平屋島田名の祭祀空間

高野 洋 志

岡山理科大学教養部

(1990年9月30日 受理)

1. はじめに

伊平屋島は、沖縄県の最北端に位置する、総面積22.27km²の東北から南東にのびる細長い島で、200m前後の山が多く起伏に富んでおり、周囲はよく発達したサンゴ礁のリーフに囲まれている。緯度の上では、鹿児島県奄美諸島の与論島に重なるが、あとで述べるように、奄美諸島とは距離的に近いだけでなく、文化的にも近い。

伊平屋村の人口は、約1500人（昭和63年現在）で、野甫、島尻、我喜屋、前泊及び田名の5つの字に分布している。このうち野甫については、国家補助をうけて昭和53年に伊平屋島との間の橋が完成するまでは孤立した島であった。また、前泊は港が整備され、連絡船による交通量が増大するにつれて住民数が増えた、比較的新しく作られた字である。

村の経済生活を特徴づけるのは、一般会計上、歳入の8割以上を、国と県の支出金および地方交付税に依存しており、村税は3.9%を占めるにすぎないという事実である。主な産業は農業と漁業及び産物の加工業だが、農業については、山が多いため水の心配があまりないかわりに耕地が少ない。昭和62年度の水稲の作付面積は157ha、さとうきびが81.45haであった。稲同様さとうきびも国が価格設定しており、作付面積あたりの収入はさとうきびのほうが上で、最近は、「土地改良事業」と称して山の裾野や丘陵地帯をブルドーザーでけずり、赤土土壌のさとうきび畑の造成が盛んに行われている。漁業については、漁場にはめぐまれているが、漁船の大半が5t未満であり、沖縄本島まで距離があるため、魚は重要でなく、アサノリやモズクなどの海藻類が漁獲高全体の8割を占める¹⁾。

島の外観は、返還以来大きく変わってきている。港湾施設が拡張され、前泊から我喜屋にいたる長大なテトラポッドの防波堤と、500tのフェリーボートの着く岸壁が完成している。島のほぼ全周に自動車道路が完成し、その三分の二以上は舗装されている。自動車は普及し、現在では野甫も含めて30分以内に海岸線を一周できるようになって、各集落の周囲の空間は、道路ぞいに極端に収縮し生活感覚上の変容を蒙っている。また、かつてリーフと、アダンを中心とした植生にまもられていた海岸線の至るところに、防波堤が建設された。この防波堤については、漁業関係者をはじめ島民のあいだに、景観をそこねるだけでなく、動植物相への悪影響が大きいとして、批判の声がきかれる。これまでリーフの内側の海を庭の畑のように気軽に歩き、食卓に並べる材料を採取してきた人々にとって、陸

と海を厳密に分け隔てるこの防波堤は、海をよそよそしいものに変えてしまう役割をはたすかもしれない。

伊平屋島は第一尚氏の祖先の出身島として、第二尚氏の出身島である伊是名島について琉球王朝に縁の深い島であるが、御嶽の信仰とノロを中心とする祭祀団、またシヌグやウンジャミ（海神祭）などの年中行事が残っているのは、島の人々がそのことを意識して、これまで何度も大きく揺すぶられた伝統を守り郷土史や村史のかたちで記録してきたからである。しかし、人口の島外流出や経済生活と生活空間の根本的変化は、今度こそ伝統文化に対する島民の価値観を変えつつある。

2. 田名の年中行事

伊平屋島の他の集落に比較して田名では数多くの行事があったが、現在公的行事として、ノロを中心とするサザカイ（神役）と呼ばれる祭司団によってとり行われるのは以下のものに限られている。

旧暦1月2日	グニント（年始祭）	7月17日	ウンジャミ（神送祭）
2月2日	トントク（農業祭）	19日	シヌグ（男児祭）
15日	ウマチ（麦穂祭）	8月	ジュウグヤ（豊年祭）
3月15日	ウマチ（麦の収穫祭）	9月9日	ニウニゲ（長寿祭）
	ウシミ（清明祭）		ヤマナジ（御嶽の縄張り）
4月4日	ターウミ（稲の豊作祭）		
5月15日	ウマチ（稲穂祭）		
6月15日	ウマチ（稲の収穫祭）	12月	ヤマグムイ（恋事祭）

まず、これらのうち特別によく知られているのは、旧盆に行われるウンジャミである。一般にウンジャミは「海神祭」という字が使用され、海神を迎えもてなしてまた送り帰すという意味の行事と考えられているのに対し、田名では、「首里から喜界島に帰る途中（喜界島から首里に上る途中であったという異説もある）のノロが嵐に会って田名に避難し滞在した。」という伝承があり、ウンジャミはそのノロを喜界島に送り出す儀式とされている。また同じ日の夕方、喜界島のノロの置土産の歌とされている「テルクグチ」²⁾を歌う行事がある。伊平屋島の南東、沖縄本島国頭村辺土名にも喜界島のノロについての伝承があり、こちらでは、嵐で水死し御嶽の前の浜に打ち上げられたことになっている³⁾。一方シヌグは、主役たるべき男子がほとんどいないために、現在は簡略化されてしまった。一歳未満の子供の健康祈願と、かつては11・13・15歳になる男子が白ハチマキをしめ袴がけで、手に棒を持ち「ニシナジャリ、ヘーナジャリ、トーガメー」と唱え、近くにいる人や動物などをたたきながら、集落のそばの山裾にあるウツカ（落川）御嶽から南の海岸近くにあるマージャ御嶽まで走る行事が行われ、夜にはウシデーク（臼太鼓）という歌と舞踏があった⁴⁾。

小野重郎は、その「奄美民俗文化の研究」のなかで伊平屋島のウンジャミとシヌグにふれて、これらが、奄美諸島南部から沖縄諸島北部にかけての、ウンジャミ・シヌグ分布圏の一角をなす、と述べている。そしてこれらの行事は、アマミキューウンジャミ折目一女の祭り一海、シネリキューシヌグ折目一男の祭り一山、という図式でとらえられ、「創世神話や祭祀儀礼や世界観の上に、このようにきっちりとした対応をもつひとつの古文化があったことがあきらかである」⁵⁾とする。沖縄の盆の行事は旧暦7月7日の祖先祭りにはじまり、13日には各家で祭壇を清め、花を生け供え物をして祖霊を迎える準備をする。14日は、朝、昼、晩の三回、霊前に食事を供え、15日に精霊送りをする⁶⁾。この間に日を定めてエイサーとよばれる盆踊りが行われる。南西諸島以外での盆行事と同じであるのは島津氏の政策で導入されたからだが、小野はそもそも本土の盆自体その原型がシヌグにあるのではないかと指摘している⁷⁾。

年中行事のなかで最も数の多いのが、稲作に関するものである。順にみていくと、旧2月、公的行事ではないが、田植えに際して無事に成育するよう各家で火の神に祈願する



写真1. 旧墓とクバの木、岩の下の石積みの中に、木棺の破片、18世紀末頃の厨子甕や人骨がまとめられている。

「田植ヲリメ」に始まり、4月4日、田仕事を一日休み、ノロトンチ（殿内）と呼ばれる場所でノロに順調な成育を祈願してもらう「ターウミ」、田名ではもう行われなくなったが、4月1日の「ムッタガイ」や29日の「アブシバレー（畦払い）」などの害虫除きの祈願、5月15日の稲穂の成育を祈願する「ウマチ」、6月15日の収穫祭、そのすぐあとに苗代始めの儀式である「ミヤ口折目」と続く。この「ミヤ口折目」については、やはり田名では行われませんが、実際の苗代始めは旧9月末から10月初旬であるから、儀式は3月も早い⁸⁾。また、6月20日には、19に区分した田地の代表がそれぞれ、「稲マルキ」とよばれる稲束を田名ノロに捧げる行事があったと記録されているが⁹⁾、平成2年3月まで田名ノロの現職にあった伊礼カマド氏によれば、戦後廃止されたそうである。11月の「アラザウリ（新早植）」ももうないが、これは象徴的に三本の苗を植える行事であった。

9月の「山ナジ」は御嶽のある山や森の掃除の日で、かつては、3月にも行われた。この日だけは、立ち入り禁止が解かれるため人々はマキを取りにはいった。終わると再び縄が張られる。

3月の「ウシミ」は、先祖まいりの日で、北東の海岸にある昔の風葬の共同墓地も掃除される。チナゴバルにあるクダチャ墓は、旅人や外来者のためのもので60年ほど前までは公的に墓参りをしていたとのことである。またカジナバルには、子供、いわゆるキズカンの墓地があったが、これには墓参りは行われていない。

12月の「山グムイ」には住民の健康、豊年の祈願と歌踊がウツカ御嶽とマージヤ御嶽で行われる。

3. 田名の祭司団

伊平屋村の5つの集落中最も大きな祭司団を抱えているのは田名で、各神役の名称は次の通りである。

田名ノロ	国吉系統 ⁽¹⁰⁾ から出る。平成2年3月に伊礼カマド氏が引退し、後継者はまだ決まっていない。
天ノロ	新垣系統。那覇在住で盆行事には帰省して参加する。
アサトノロ	仲地系統。田名在住。
ハミシ神	諸見系統。那覇在住。行事には娘が代理として参加する。
ナダシ神	平田系統。那覇在住。長女が代理でくる。
オーシド神	仲里系統。嫁いで那覇在住。本人が帰省して参加。
ユームイ神	前里系統。田名在住。
ユートイ神	仲川系統。那覇在住。代理が参加。
イシド神	与那嶺系統。田名在住。
ユチナ神	知念系統。沖縄本島在住。代理が参加。
ナミスセークラ神	仲村系統。那覇在住。代理が参加。

ヒドノトイマシ神	大城比嘉系統。田名在住。
ヒドノシヌイ神	新垣系統。田名在住。
ノダキトイマシ神	伊礼系統。那覇在住。本人が帰省して参加する。
トダキトイマシ神	前原系統。前任者が亡くなってから後継者なし。
ボタン神	新垣系統。那覇在住。本人または代理が参加する。
ハラタキノオ神ガナシ	大見謝系統。田名在住。
トダキメークル神	比嘉系統。那覇在住。本人が帰省。
メーノオクラノ神	安里系統。田名在住。
フダキトイマシ神	比嘉（ゴゼ）系統。田名在住。
ダナンサー（田名の比屋）	伊礼孝進氏。
ユヌシンサー（世主の比屋）	伊礼孝進氏が兼任。

ちなみに他集落の神役は以下のとおりである。

	ノロ	女神	男神
野甫	ノロクモイ	ウチ神 ニジツ神 ユラミチ神	ヌフシー ヌフンチ アマイ
島尻	我喜屋ノロが 兼ねていた	ユムイ神 アキス神 ムッチャサー（アフラ神）	前田ノサー エンマノサー メーイ神
我喜屋	我喜屋ノロ （継承されていない）	ユチナサ神 ハミシ神 シドー神 ユムイ神	イヒナサー アンナサー

前泊

（シヌグナー祭神役）

田名に「ノロ」と名のつく神役が3名いることについて、現在の田名はむかしの大田名、カヂナおよびクサトの3集落が合併したものであるから、アサトノロはカヂナ系、テンノロはクサト系ではないかという説がある¹¹⁾が確かではない。18世紀の神人組織を調べるうえで欠かすことのできない文献である「琉球国由来記」には、伊平屋島について、我喜屋ノロと田名ノロの名しか見ることができないので、祭司団の吸収合併が行われたとすれば「由来記」編集以後であろう。もうひとつの可能性として考えられるのは、テンノロとアサトノロが、奄美大島で見られる、親ノロを補佐する「ワキノロ」に該当するのではないかということである。ただし、この「ワキノロ」は役割上「スダガミ」に代わるものであることが多い。田名の場合は、奄美大島での「スダガミ」に該当する神役は「海神」とされるオーシド神である。

田名ノロの勤めは、現在でこそ年中行事が省略・簡略化されているが、儀式的中心的役

割をはたさなければならないだけでなく、行事のない日でもノロ殿内に朝夕通り掃除をして、ノロ火の神に毎日の出来事の報告をした。王国時代には、任命または承認されたノロ以上の神女のこのような勤めに対し報酬があたえられていた。上級の神職には米の石高で俸給が与えられ、各集落のノロはノロ地と呼ばれた耕地を継承した。田名のノロ地は明治の土地整理で一町歩程度がノロの私有地として登記され、さらに戦後はそのうちの720坪が字の共有地として残っている¹²⁾。

年中行事における神人の役割は、常に同じというわけではない。ウンジャミでは、海神としてオーシド神を先頭に、ユームイ神、ユートイ神、イシド神の4名が中心となって、神送りを行う。これらの神名は船上の役割に由来し、オーシドは船頭、ユートイはアカ汲み、イシドはアンカーのことであるという。旧暦9月の山ナジには、5か所の御嶽で掃除と祈願が行われるが、ミサキ嶽にはアサトノロ、グスク嶽にはダナンサー、ウツカ嶽には田名ノロ、マージヤ嶽にはオーシド神、アサ嶽にはハミシ神が「ムト（元）」として行く。



写真2. ウンジャミ。田名ヤーの前で舟型が作られ、海神達が控えている。このあと女神達全員で舟型を囲み「メーヌカイ、メーヌカイ（面舵、面舵）」と唱え、東の海岸（アカシ）へむかう。

海神以外の神名の由来は現在ほとんど伝わっておらず、かつてそれぞれの行事で明確な役割を果たしたにちがいないが、今となっては不明な点が多い。

神役の継承は、それぞれの女神を出す家系がきまっている。この家系は長子相続で、原則として長女が女神となり終身職である。他家に嫁いだ場合も資格には支障はない。しかしこの継承は決して機械的なものではない。ノロ、神人に選ばれる者は、兄弟姉妹の中でも子供のころから血の気の多いもの、においの強いものは食わず、新鮮で清潔な物を選んで食べたりするなど、その性格に神性が現れ、このような人だけが神前のクジ引きで選ばれりとされている。

女神に対して男神は現在1名だけであるが、その役割はたいへん重要である。年中行事の準備と進行の責任者であり、とりわけ、ウンジャミの日の「テルコグチ」やシヌグの日の「あま世」、「大城グエーナ」、「道うた」などの古歌の貴重な伝承者でもある¹³⁾。

このような神人の在りかたについて、小野重郎は「ノロたち神人は本土の神社一般にみる神職のように神に供え物をし、神に頼みごとの祝詞を唱える人ではない。ノロたち自身が神そのもので、人々の供えた芋を食べる¹⁴⁾」と述べている。女神たちは村落の最も古く有力な「根」の家系の「オナリ」つまり守護神であり、それが村落全体の行事を行うことで、村落の守護神となる。その資格で、海の向こうから訪れる神や天から降りてくる神に豊作や住民の健康を祈願するのである。

4. 田名の祭祀空間

神役の行う年中行事や祈願は、その目的に応じて特定の場所で行われる。田名については御嶽だけでも5か所あり、それにノロ殿内、田名屋、村墓がある。

御嶽は、伊平屋島では「ウタキ」と発音される。奄美諸島で、モリヤマ、オボツヤマ、オガミヤマ、あるいはもっと一般的にカミヤマと呼ばれる聖地に相当し、そこではオボツ神の居る所として恐れられており、この神の里においてきて災いをもたらしたり、逆に災いから守ってくれたりすると考えられている。八重山諸島ではオガン、ウガン、オン、ワー等と呼ばれているが、起源は多様である。これらの聖地は山や丘であったりも平地であったりするが、信仰の対象として立ち入りについてタブーがあり鬱蒼とした森に囲まれているという共通点がある。

田名の御嶽を一例ごとにあげてみよう。

a. ミサキ（三崎）嶽：信仰の対象はアウサキムイ（青崎森）と記録されている¹⁵⁾。島の北東端に位置し、灯台がある。クバの木に山全体がおおわれており、天然記念物となっている。クバは神の寄りしろとなる神聖な木と考えられている一方で、葉で笠や蓑を作ったり幹の繊維でマットを編んだりし生活に不可欠な樹木である。ウタキとされることでこのクバは大切に保護されてきた。また「アウ（青）」について、仲松弥秀によれば「大宜味村喜如嘉の海神祭神歌の『諸神を送るウムイ』に、『アウの神送苦やびら……。』の句が

ある。このアウの神はニライ・カナイを『青の世界』と観じていたのとおなじく、死者の往くところも『青の世界』と想念していた⁶⁾。天の岩戸はクバ山のすぐ近くにあり、旧村墓からウンジャミで喜界島のノロをおくりだす浜からもこの御嶽はよく見える位置にある。しかし、山ナジを除いて、この御嶽の関係する行事は知られていない。

b. グスク（城）嶽：田名の集落はこのグスク嶽を背にして山裾の斜面にある。集落の裏手に頂上に続く登り口がある。そのそばにはこの御嶽の遥拝所があり香炉が置かれている。まんなかに線を入れた香炉は、琉球王府直轄地であったナカグスク(中城)を表現し、尚円王の子孫と称する者が訪れて礼拝をした際に置いていったそうである。信仰の対象はクサテイ(腰安庭)と記録されている。北西側にあって季節風から集落を守り、水源林であり、薪を提供してくれるなくてはならない山森を腰安庭神または腰当神としてのその保護を期待する。「グスク」の名は山頂にある遺跡に由来している。頂上には長さ約8m、巾約5m、深さ1.5mのくぼみがあり、標高にしてそこから7～8m下とさらにもう少し下の等高線に沿って山頂をとりかこむように二重の石積みがある。上の石積みのほうが良く保存されており内側の高さが1mぐらいであるが、道脇の所はとくに高く積まれている。山頂のくぼみのまわりには二箇所香炉が置いてある。田名の起源伝説では、かつてここで戦いがあり、攻められて生き残ったただ二人の兄妹がこの集落の始祖となった、と語られている。

c. ウツカ（落川）嶽：グスク嶽から谷の水が、集落のすぐ裏手に流れ落ちる。信仰の対象はアフリムイ（涼傘森）と記録されている。アフリムイが信仰の対象になっている御嶽



写真3. 野甫のアフリ嶽

には野甫のアフリ嶽（「琉球国由来記」の記述であり、現地では“アウリ嶽”である）と我喜屋のカム（神）ノ嶽があるがいずれも海岸にある。カムノ嶽はクバ山で航海安全の祈願が行われる。地形からは、従って、共通点は見いだせない。ウツカ嶽は以前シヌグで、男子達が演ずる荒々しいシヌグ神の出発点となっていたがのに対し、アフリ嶽もカムノ嶽もシヌグとは関係ないようである。若松弥秀は、アフ、アウ、アホなどはもともと同じで、「青の世界」であるニライ・カナイの神を祀っているとしている¹⁷⁾。ミサキ嶽については、他のアフリムイを祀っている御嶽との共通点を見いだせるであろう。しかし、ウツカ嶽は山グムイで田名ノロが手や足を洗って身を清めるという水場であり、そのこととアフリムイの名称にどういう関係があるのか不明である。

d. アサ嶽：集落の南西方向にある、標高218mの山で、信仰の対象は、クンダムイ（非森）と記録されている。「クンダ」は“こむら”のことで、グスク嶽に腰を当て、脚をのばせばふくらはぎの位置にこの山があるという意味かもしれない。稲作の行われる盆地の重要な水源の山で、山ナジの際にはハミシ神がムトとして行き、掃除のあとで「フニヤカルユシシミーエ、ヨクユーハラシーユ」（船が軽く波をおしわけてくるように）、「カラダジュークオニゲイスル」（村民の身体が丈夫であるように）というような航海安全、村民の健康祈願を行う。

e. マージヤ嶽：田名の南、前泊の集落に近い海辺の森の中にある。信仰の対象は、カカラムイ。かつてのクサトの集落がこのあたりにあり、カー（井戸）を守護神としていたと伝えられている。シヌグの行事で男子達が到着すると、戦前は、兵隊に行っても無事に戻ってくるように祈願がおこなわれたという。また、山ナジの際にはオーシド神がムトとして行き、辺土名の方角をむいて、子供達が沢山生まれ丈夫に育ち、田名がもっと大きくなるようにと祈願する。沖縄本島の辺土名と交通があったことは、喜界島のノロに関する伝承が辺土名にも伝わるで推測できる。

御嶽が、集落全体の守護神を祀る聖域であるなら、ヒヌカン（火の神）は、より細分化した信仰の対象である。もともとカマド神として各家庭の台所に祀られる以外に、職業に関係するヒヌカンがある。田名ノロヒヌカンは現在集落の一番山の手になりそこがノロトンチ（殿内）と呼ばれる家屋になっている。ダナンサーヒヌカンも同じ敷地内にありこちらは小さな社となっていてダナヤーと呼ばれる家屋に接続している。双方とも、もとは百メートル程下手にあって、ダナヤーの敷地内にアサギと呼ばれる特別な祭祀用の建築物があった。長辺が3間ほどの長方形の四隅に低い柱を立て茅葺きの屋根をのせた構造で、20名の女神が中に入ったときに腰から上が隠れるようになっていたそうである。稲穂祭で女神たちがここに入って供物を口にしたり、収穫祭には、田名ノロに捧げられた稲の束がここにたくわえられるなどの儀式に使用されていた。アサギは両ヒヌカンの移転後再建されていないので、今はダナヤーがその機能も兼ねている。

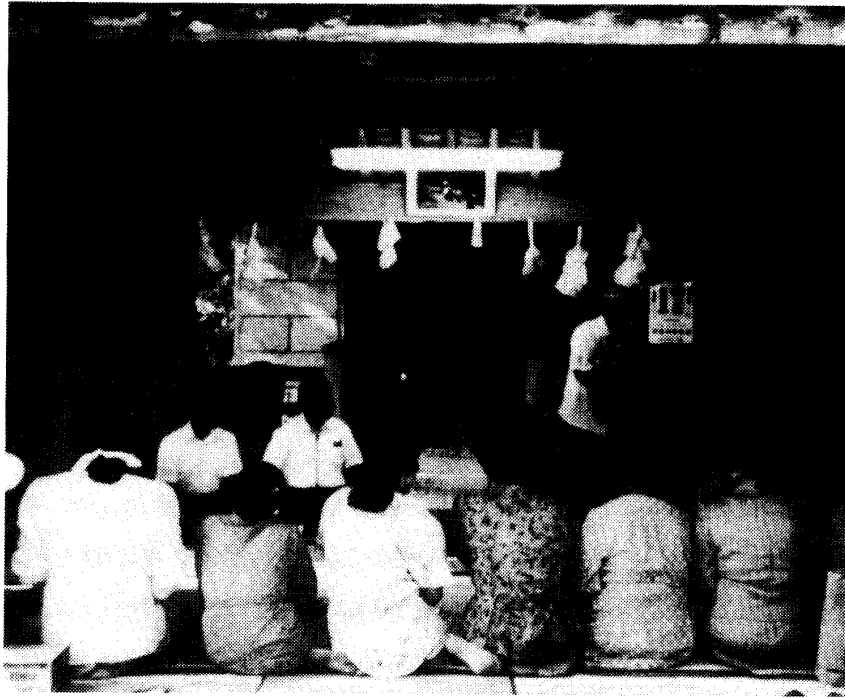


写真4. 田名ヤーと奥の火の神。ウンジャミの日の夕方、田名ンサーが「テルクグチ」をうたう。

各家庭では、12月24日に、「昇天して休みにはいる」といわれるヒヌカンに供物をする
が、公的行事としては何もおこなわれていない。「天」に昇り降りするヒヌカンはいわば
メッセンジャー的な存在と考えられているようである。

田名の外から見物や参拝にくる人が多いクマヤーは天然記念物に指定された洞穴で、ク
バ山の手前の海岸にそそりたつ岩山を10数m登ったところに狭い入口が開いている。前面
の岩がずり落ち、わずかなすきまを残して戸のように入口をふさいだようなかたちになっ
ている。内部にはすきまから流れ込んだ砂がたまり、この砂の斜面を5mほど下ると広い
空間があり、その奥にはさらに、せまい二本の洞穴の入口がある。現在は土砂に埋まって
ふさがっているが、それらはかつて別の場所に通じていたといわれている。小さな社が穴
の前に置かれ、果物や酒が供えてある。ここを「天の岩戸」と呼ぶのは、岩戸神話の舞台
を伊平屋島とした国学者がいたせいだが、どうしてそのような説が成立したのかは不明で
ある。もともと田名の住民の信仰の対象ではなかった場所であっても、沖縄本島からユタ
が参拝したり、調査が行われたりすることで、土地の住民のあいだでもクマヤーがただの
洞穴以上のものとなりつつある感じが感じられる。たとえば、昭和53年8月にクマヤー前
の海で貝を取っていた田名の老人は、筆者に、「赤や青の黄色にピカピカ光るものが洞穴
のある岩山の上に降りてくるのを何度かみた」と語った。平成元年8月のウンジャミで、
喜界島のノロを見送る女神達の行列に従っていた田名の中年の男性は、この儀式はもとも
と天の岩戸にいた天照大神が本土に向かって出発するのを見送ったことから始まったのだ
ろう、と語った。最初の証言は、八重山諸島あたりの御嶽起源の、「あるひとが、たびた

び『神の火』がみえた場所を信仰の対象としたら彼の作物が豊作だったから、部落全体で信仰することになった」という話に連なる可能性をもつ。またもうひとつの例では、田名のウンジャミの解釈として、この儀式がこれまでは、第一尚氏の王朝が1466年の遠征で支配下に置き、第二尚氏の王朝が島津氏に敗れて失った、喜界島など奄美大島海域との交通を再現し続けることで琉球王朝の「根」の島たらんとする意味をもっていたのに対して、「天の岩戸」を引き合いにだすことで、今度は日本の「根」の島であることを志向することになる。クマヤーは、従って、伝統的文化や精神的“風土”が存続するならば、田名の住民のあらたな信仰と祭祀の対象となる可能性をもっている。

田名の集落が「腰を当ている」グスク嶽は田名の起源であり、保護してくれる山である。また、そこはアサ嶽とともに「天」に近い場所として祈願がおこなわれる。グスク嶽のふもとで、ウンジャミやシヌグの神々が迎えられ、それぞれ海に送り出されるという古い儀式に、喜界島のノロを送り出す、大きくなった男子を島の外に送り出す儀式という解釈が与えられた。送り出されるのは神々だけではない。北東方向へ道をたどれば、最近の個人墓の並ぶ場所につづいて、ひとむかしまえの亀甲型の門中墓が並ぶ場所があり、その先には、浜にそびえたつ岩の下に、戦前まで使用されていた風葬の村墓がある。この岩の下の墓地が使用される以前にはクマヤーが利用されていたかもしれない。さらに行くとも死者の行き着く「青の世界」が祀られているミサキタキのあるクバ山に至る。



写真5. ウンジャミ。アカシで祈る女神達。後方左から旧村墓の岩、クマヤー、クバ山がみえる。

「伝説が無くとも、村人が知っていなくても、その村の神や拝所と祭祀と司祭者の出家を知ることさえ出来れば、それが古文献や伝説以上の村の地理的、歴史の変遷、その内部構造をも明らかにさせてくれる最上のもの」である、と仲松弥秀が述べている¹⁸⁾ように、

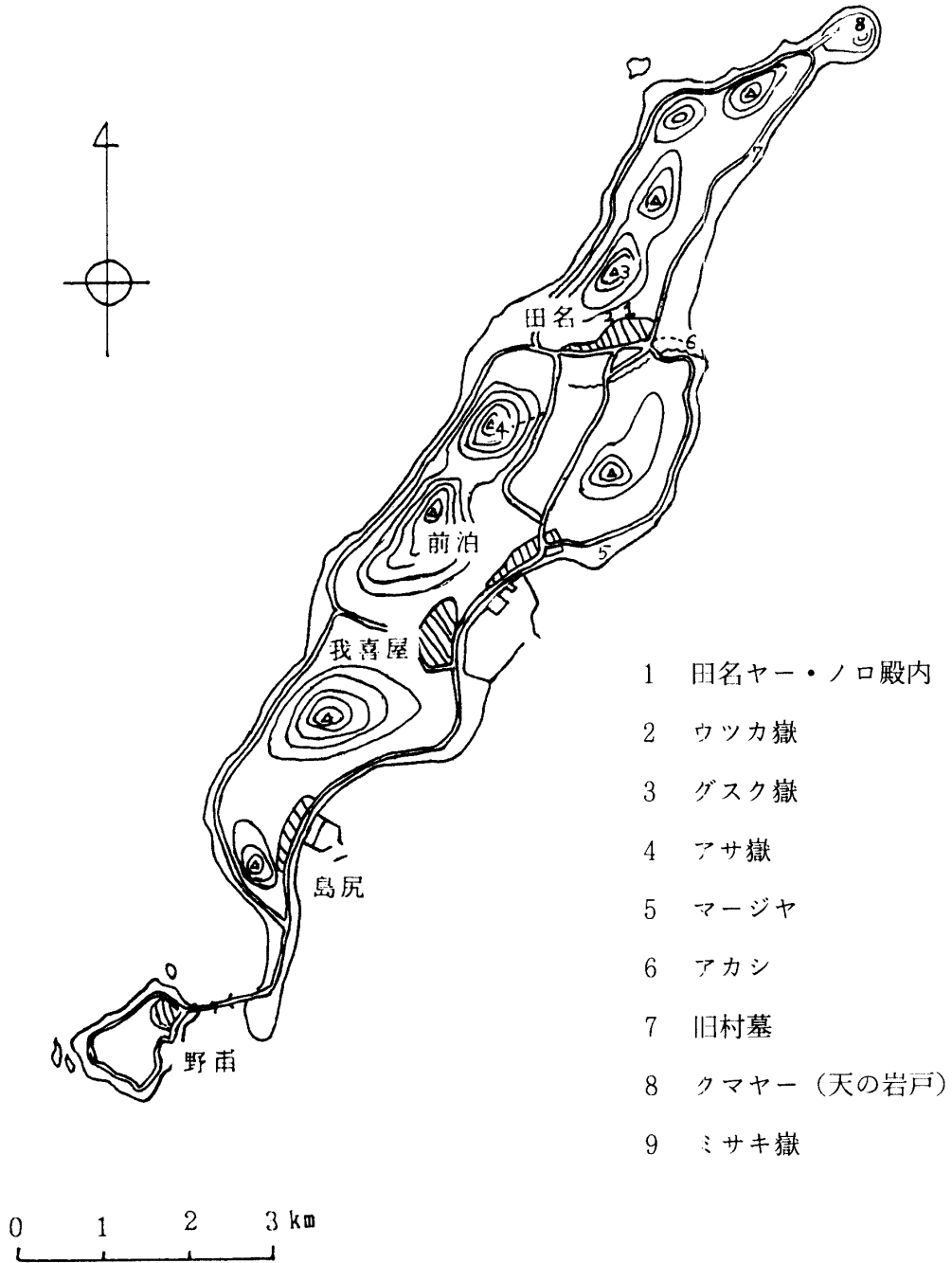
田名の御嶽、信仰の対象やそれぞれの御嶽に「元」としてかかわる神役の出身家系は、集落の成立過程の証人であると同時に、アマミキユ・シネリキユの創世神話に基づいた世界観に、ナルコ・テルコ神の居る海の彼方の他界観、オボツ・カグラ神の居る「天」の観念、それに道教的な火の神や土帝君¹⁹⁾の信仰が重なって、複合化した思想の、空間的表現でもある。このような性格を持つ御嶽は、他界と他界の神に最も近い場所として、立ち入りを制限され、特定の祈願を行う上で極めて特権的な場所となっている。

集落の周囲の山や森や岩に与えられた意味により、島の空間ははるかかなたまで広がり時間的な深みを持っていた。これらの意味が忘れられ、薄れていくに従って、もともとごくありふれた山や森や岩でできた風景は、狭く退屈だけでなく、拘束となる。そのことは急ピッチで進む、土木工事による空間の変様や人口の流出に密接に結びついているにちがいない。

注 記

- 1) 「“いへや” ’88伊平屋村勢要覧」の資料に基づく。
- 2) 「テルクグチ」は創世神のテルクミをたたえ田名の繁栄を願う歌で、「伊平屋島民俗散歩」(上江州均著, ひるぎ社, 那覇, 1986)に収録されている(P.112~5)。
- 3) 「沖縄のノロの研究」, 宮城栄昌著, 吉川弘文図書館, 東京, 1979
- 4) 「伊平屋列島文化誌」, 仲田清英編著, 台北, 1973年, P.962
- 5) 「奄美民俗文化の研究」, 小野重郎著, 法政大学出版社, 東京, 1982, P.344
- 6) 「伊平屋列島文化誌」, P.955
- 7) 「奄美民俗文化の研究」, P.326
- 8) 「南島の稲作文化」, 渡部忠世・生田滋編, 法政大学出版社, 東京, 1984, P.52
- 9) 「伊平屋列島文化誌」, P.948~9
- 10) 男系の血族で、現地では「系統」という語が使われている。
- 11) 「伊平屋島民俗散歩」, P.102
- 12) 「沖縄のノロの研究」, P.465
- 13) 「伊平屋島民俗散歩」, P.119~123, にそれぞれ一部分歌詞が収録されている。
- 14) 「奄美民俗文化の研究」, P.19
- 15) 「伊平屋列島文化誌」, P.835
- 16) 「神と村」, 仲松弥秀著, 伝統と現代社, 東京, 1977
- 17) *ibid.*, P.86
- 18) *ibid.*, P.9
- 19) 土帝君は田名で「トントク」と呼ばれ、旧2月2日の農業祭で、土地の神として豊作の祈願が行われる。

伊平屋島田名の祭祀空間・地図



Espace et Rites d'un Village d'Okinawa

Hiroshi TAKANO

Faculte des Etudes Générales

Université d'Okayama pour les Sciences Naturelles

1-1, Ridai-chō, 700 Okayama-shi, JAPON

(Reçu, le 30 Septembre 1990)

Les îles d'Okinawa sont encore riches des rites traditionnels qui étaient, et qui ne sont plus, indispensables pour le cours normal de la vie communautaire et surtout pour l'unité des villageois. A Dana, un petit village au nord de l'île d'Iheya, les rites ont lieu non seulement dans le village mais aux lieux sacrés répartis dans l'espace territorial du village. Ces lieux sacrés, ayant leurs propres prêtresses ou prêtres issus des filiations patrilinéaires, sont à la fois les endroits privilégiés pour faire entendre leurs prières aux divinités du ciel ou du monde éternel au-delà de la mer, et les témoins de l'histoire de ce village par leur position et par leur fonction. Nous avons essayé, dans cette recherche, de reconstituer la vision du monde et les croyances des habitants de Dana en étudiant les rapports entre leurs lieux sacrés et leurs rites.